

渋沢栄一の「論語と算盤」

渋沢栄一は、「論語の半部をもって身を修め、半部をもって実業界を救いたい覚悟でいる」と、明治6年（33歳）に、大蔵省を辞める時に語っています。

以後、五十余年「論語の教訓によって商業、工業を務めて来たので、自分のこれまでしたことは、地下における孔子に叱られぬつもりである」と自負しています。

日本資本主義の父と呼ばれ、500社以上の名だたる企業設立に関与し、ドラッガーも傾倒した渋沢栄一。

明治の三井・三菱・住友・安田等の財閥が台頭する中で、「私利を追わず、公益を図る」との考え方を生涯に亘り貫き通した、さすがの生き方。

「武士道と実業道は、どこまでも一致しなければならない。また一致できるものである」とも語っているが、栄一自身、幕末から明治の激動の時代を生きた彼だからこそ、その一言には圧倒的な説得力があります。

混迷を深め、先行きが見通しづらい今こそ、我々経営者は、日本の偉人・本物の経営者、渋沢栄一に学ぶべきではないでしょうか。

入門書は「富と幸せを生む知恵」渋沢栄一著 実業之日本社が、お奨めです。

その中に、珠玉の言葉が100話あります。その中で、3話を拾い読みします。

「論語は、人間行為の完全なる標準であるから、これによって人間として踏むべき道のすべてを学んでほしい」

個人的規範には、四書の中で、論語が一番いいと語っています。

「事柄の大小にかかわらず、人物の上下を問わず、自分の向こうに立つ人に対しては、満身の誠意を注いでこれに接している。」

一事が万事、人間の深い愛と、鋭い洞察があります。我々も、こうありたいものです。

「金はたくさん持つな、仕事は愉快にやれ」

ついつい、逆になっています。もっと、もっとは、仕事であって、しかも喜んで、楽しく、人間的にも成長していくことでしょう。

「論語読みの論語知らず」かりそめにも論語を素読し、論語を学びながら、自の業務に精励できず、不平不満を口にし、人の批判はするが自己を修められなかったら、其れは將に、「論語読みの論語知らず」以外の何ものでもありません。

経営には、「算盤」も大事です。同時に「論語」も非常に大事です。



今月のポイント

「論語と算盤」の高度なバランス。

終わりのなき向上を目指しましょう。